

受賞のことば

最優秀賞



大阪府羽曳野市 松田良弘 さん

この度は素晴らしい賞を頂き、誠にありがとうございます。思わぬ知らせに今も身体がドキドキしています。

コロナ禍でいろいろなことが閉ざされていますが、どんな時でも、人と人、心と心の繋がりには失つてはいけないと思います。そんなあたりまえの事を気付かせてくれたトモダチに、まずはこの喜びを伝えたいです。

これからも道端にそっと咲いている花を見つける度に、その幸せを、咲く文^{ぶん}にして、誰かに届けて行きたいと思います。

最優秀賞

五月のトモダチ

大阪府羽曳野市 松 田 良 弘

私の住む町内には、年に二度、町内一斉清掃の日がある。毎年五月と十二月の第二日曜日に、自宅周辺の草引きや溝の掃除などを行う恒例の行事だ。参加は任意なのだが、日々希薄になりがちなご近所付き合いのために、私は毎回参加するようにしている。何より町が綺麗になることは気持ちいい。

私の家の隣に一軒のハイツが建っている。ワンルームタイプで家賃も安いらしく、若者の顔をよく見かけた。ハイツのオーナーは隣町に住んでいるご老人だったが、清掃の日になると、自ら作業に参加してくれた。この辺りは子供達の通学路にもなっているもので、安全のために、清掃日以外も時々見回りに来ては、ハイツの敷地から伸びた雑草や、周囲の道の掃除もしてくれていた。

しかしそのオーナーが亡くなると、家族はハイツを

手放した。それからは不動産会社が管理をしているのだが、部屋の内覧や入退去の日以外、会社の誰もハイツには顔を見せなかった。すると、伸びた雑草のおかげで虫の発生が酷く、通りの見通しも悪くなった。

そこで、私を含めご近所さん数人で、一斉清掃の日にはハイツの掃除もすることにした。敷地内は私有地なので勝手に入ってはいけないのだが、そんなことは言っていられない。雑草は根元から刈らないと意味がない。私達はみんな協力して、町の景観と通学路の安全を守っていた。しかしコロナ禍の影響で、昨年からは清掃に参加する人が少なくなった。感染対策は施しているが、やはりみんな躊躇してしまいうようだ。元々任意参加だし、こればかりは仕方がない。今年の五月は、近所では私だけの参加となった。

私は自宅の周囲を掃除したあと、一人でハイツの草刈りに取り掛かった。夏本番に備えて、今のうちに根こそぎにしたい。私は鎌とスコップを使い、黙々と作業を進めていた。

「ワタシモ ヤリマス」

突然、おぼつかない日本語が耳に入った。顔を上げると、一人の青年が私の横に立っていた。すると、彼は足元の草を素手で抜きはじめた。

最近、ハイツに外国人の青年を見かけるようになった。毎朝早くに自転車で出掛け、夕方になると油まみれで帰って来る。夜には美味しそうなスパイスの匂いが窓から入ってきた。そして、誰かと電話をしているのか、聞き慣れない言葉が聞こえていた。

「大丈夫です、私がやりますから」

私は慌てて言った。すると、彼は手を止めて私の顔をじっと見た。

「ボクノイエ キレイニスル アタリマエ」

彼はニコツと笑った。

「アタリマエ」じゃない。こんなことは初めてだった。今までハイツの住人が清掃に参加したことはなかったのだ。いつも、住人は避けるように私達の横を通り過ぎて行く。それが悪い訳ではないのだが、私はなんだか寂しい気持ちになっていた。

「ありがとう。では一緒にやりましょう。草刈りしましょう！」

私は彼に軍手と鎌を渡した。彼はそれを受け取ると、

「LET, S M O W T H E G R A S S !」

と流暢な英語とともに、親指を突き上げた。

作業をしながらお互いの自己紹介をした。彼はインドネシア出身で、企業研修生として二年前から車の修

理工場で働いていた。現在二十五歳で、故郷では両親と弟二人が彼の帰りを待っているとのことだった。五年間日本で技術を学んだあと、インドネシアで自動車関係の仕事に就きたいと語った。

「アナタ ミマシタ ギター モッテイタ」

彼が思い出したように言った。私は趣味でギターを弾いている。彼に見られたのはバンドの練習帰りの時だろう。彼は続けた。

「ボクモヒク ギター」

「???そうか!あの音はそうだったのか!」

時折、外からギターの音が聞こえてくる。それはとても優しく心地いい音色だった。彼の人柄が表れているようだ。

「あなたの音、私大好きです!」

興奮している私を見て、彼は照れたようにうつむいた。彼が頑張ってくれたおかげで、あたりは見違えるように綺麗になった。最後に二人で刈った草を集積所に持って行くと、町内会の役員が缶コーヒートを配っていた。私は役員に彼のことを説明した。

「ありがとうございました。これどうぞ」

役員が差し出した缶コーヒを、彼は受け取っているのか迷っているようだった。

「アタリマエ シタダケナノニ・・・」。

帰り道、コロナが終息したら二人でギターのセッションをする約束をした。

“トクベツ” な一日。彼と二人で飲んだコーヒーは、トモダチの味がした。